

# THE NICE AND THE GOOD

IRIS MURDOCH

THE NICE AND THE GOOD

IRIS MURDOCH

アイリス・マードック著 石田幸太郎 訳

愛の軌跡



創元社

## 訳者略歴

- 1894年 京都に生まれる  
1919年 京大英文学科卒業  
1924年 梅花女子専門学校教授、かたわら京大哲学  
科に学ぶ  
1953年 立命館大学文学部教授  
現在 ノートルダム女子大学文学部教授  
主要翻訳 ゴールズワージ『争闘』（岩波書店）  
同『花咲く荒野』朝日新聞連載  
(土井逸雄氏共訳)  
エイズワース『ロンドン塔』  
(初版、改造社；改訂版、旺文社)  
マードック『天使たちの時』（筑摩書房）  
ハンフリー『現代の小説と意識の流れ』  
(英宝社)

## 愛の軌跡

The Nice and The Good

by Iris Murdoch

---

© 昭和47年11月10日 第1版第1刷発行

定価 1,300円

訳者 石田幸太郎

発行者 矢部良策

印刷所 寿印刷株式会社

発行所 株式会社 創元社

大阪市北区櫛上町45 郵便番号[530]

電話大阪(363)2531 振替大阪57099

東京営業所 東京都新宿区山吹町77 郵便番号[162]

電話東京(269)1051

落丁・乱丁はおとりかえいたします。

---

0097-471002-4202

## I

夏の日の昼下がりであった。英国政府の庁舎の執務室で静かに仕事をしていた長官は、すぐ身近なところで、まぎれもないピストルの音を耳にして、思わずぎょっとした。

彼が愛している妻から時おり入ものぐさデブさんVとか、ハゴムマリさんVとか呼ばれることのあるオクテイヴィアン・グレイは、昼食の時に飲んだバーガンデー産のすばらしいブドウ酒の快い、うっとりとするような匂いを漂わせながら、クリーム色の公用箋にきちんと整った小さな文字でしゃれのきいた文章をゆっくりと書き綴っていた。ピストルの音がしたのはその時であった。

オクテイヴィアンはぎょっとして椅子から立ち上がった。彼の部屋からそんなに遠くない、まさしくこの建物の中で、ピストルの音がしたので。その音は聞き間違えようがなかった。彼が一軍人としてピストルの音を最後に耳にしてから、もう何年も経っているが、彼はその音をよく覚

えていた。彼の肉体がそれを知っているのだ。だから、今では彼にとって非常に縁遠いものになってはいるのだが、その記憶と、そして全く新しい、いやな要求をつきつけられているような感じとで、身をこわばらせてその場に突っ立っていた。

オクテイヴィアンはドアの方へ行った。ロンドン市街のあわただしいざわめきのご真ん中にありながら、風通しが悪くて熱気のもった廊下は、ひっそりと静まりかえっていた。「どうしたのだ？ 何事が起こったのだ？」と、彼は大声で叫ぼうとしたが、身分上そんな事はできないのに気づいた。そこで部屋へ戻り、彼にとっては生命の綱であり、またそれを通して世間と結びついている電話器の方へ本能的に近づいて行った。ちようどその時、こちらへ走って来る足音を耳にした。

「長官、長官、大変です！」

色白の顔にピンクの唇と淡青色の瞳をもつ、赤毛の公文書送達吏マグラーが、ドアのところで体を震わせながら立っていた。

「のけ」オクテイヴィアンの次官の一人リチャード・ピランが体をねじこむようにしてマグラーの前を押し通り、

彼を部屋の外へ押し出すと、ドアを締めた。

「一体何事なんだ？」オクテイヴィアンはたずねた。

ピランはドアに背中をもたせかけて立っていた。彼はちよつとの間、荒い息をしていたが、すぐにいつものかん高い、非常にはつきりした声で答えた。「オクテイヴィアンさん、実は、わたしにもほとんど信じられないことですが、ラディーチーがたつた今自殺したんです」

「ラディーチーが？ 何ということだ。死んだのか？」

「死んだのです」

オクテイヴィアンは椅子に腰をおろした。彼は赤い吸取紙の上にクリーム色の公用箋を拡げ、書きかけの文章を目で追った。それから再び立ち上がった。「行った方がよさそうだな——現場を見に」彼はドアの方へ歩いて行った。ピランがドアを開けた。「警視庁には連絡した方がいいだろう」

「わたしの独断ですすでに連絡はしておきました」とピランは答えた。

ラディーチーの部屋はすぐ下の階にあった。締めきつたその部屋のドアの前には小さな人垣ひとかきができていた。口をあけ手をだらりとさせて突っ立っている人たちにマグラーが

何かしゃべっていた。

「のきたまえ」オクテイヴィアンが言った。みんながオクテイヴィアンに目をそそいだ。「みんな部屋へ帰り給え」と彼は言った。集まっていた人たちはのろのろと立ち去って行った。「君もだ」と彼はマグラーに言った。ピランが錠をはずしドアを開けた。

開かれたドア越しにオクテイヴィアンはラディーチーが机の上に顔を横向けにして倒れているのを見た。二人は部屋の中へはいった。ピランは内側からドアの錠をかけたが、ちよつと思案してから、また錠をはずした。

ラディーチーの赤茶色の首の肉が白いワイシャツの堅いカラーの上に盛り上がっていた。オクテイヴィアンはそれを見るときぐに、ラディーチーが眼を開いているのではないかと思つた。しかし顔は陰になっていたので覗きこまねば、はつきりわからなかった。ラディーチーの左腕はだらりと床の方に垂れさがり、右腕は机の上ののっけていて、その手のすぐそばに軍隊で使われていた古い型のピストルがあった。オクテイヴィアンはどつしりと落ち着いていることが必要だと考えた。そしてゆっくりと呼吸を整え、気持をしっかりさせて、自分が何者であるかを自分自身に言い

聞かせた。彼はこれまで多くの死体を見てきた。だが夏の日の午後、ホワイトホールの中で予期しない時に、突然堅いカラーの上に肉の盛り上がった死体を見たことは、これまで一度もなかった。

オクテイヴィアンはすぐに自分がこの省庁の長官であり、それゆえ冷静に振舞い、責任をとらねばならないのだと自分自身に言いかけた。彼はピランにたずねた。「ラディーチーを最初に発見したのはだれかね？」

「わたしです。わたしがこの部屋の前を通りかかった時、ピストルの音がしたのです」

「この男が死んでいることは間違いないだろうね？」この問には気味悪げな、ほとんど当惑したような響きがあった。

ピランは「彼は完全に死んでいますよ。傷口をごらんください」と言って、指さした。

オクテイヴィアンは死体の方に近寄った。彼は机をぐるっと回って、ラディーチーの顔が向いている方の反対側へ行き、椅子の上におおいかぶさるようにして、後頭部の頭蓋骨底部のくぼみの少し右側にある丸い穴を見た。穴は意外に大きく、ふちの黒ずんだ黒い穴であった。血が少しシ

ヤツのカラーの内側に流れ落ちていたが、思ったほど大量の血ではなかった。

「彼は銃口を口の中へ向けたにちがいありません。たまが完全に貫通していますから」とピランが言った。

オクテイヴィアンは、気味の悪い、傷ついた首筋の上の半白の髪が、ごく最近刈られて、さっぱりしているのがついた。彼はその髪の毛にさわってみたい、ラディーチーの上着の布地にもふれて、それをそっとしかも念入りにもみくちゃにしてみたいという衝動にかられた。そこにはさまざまな要素が集まって形作られた一個の人間と、衣服や、生活に必要な品物が存在していた。生命が絶えるということの神秘さに、生きている人間が突然各要素に分たればらばらになり、物質に分解されてしまうことに、彼は愕然がたがたとなった。多くのことをやりそなってきたラディーチーも、このこと、自殺については失敗しなかったのだ。オクテイヴィアンはラディーチーに対して特別な好意は全く持っていなかった。またラディーチーを特によく知っているというわけでもなかった。ラディーチーは政府のどの省庁でも見かける風変わりな人物の一人であった。彼は非常に頭も切れ、すばらしい才能も持ち合わせてはいたけれ

ども、彼の判断力には何か本質的なものが欠けていて、局長以上の地位につくようなことはなかった。ラディーチーはなんとなくどこかおかしな奴だVというふうに見られていた。だが彼はそれに満足しているように見えた。彼は役所の仕事以外に興味を持っていて、しょっちゅう特別休暇を願ひ出していた。この前の時は「音の精」(不思議な音はこと言われ、心霊現象の不可解な音の主たとも仮定される)を研究するために彼が休暇をとったのをオクテイヴィアンは思い出した。

「遺書を残しているかね？」

「見たところでは無さそうです」とピランが言った。

「彼らしくないな」とオクテイヴィアンは言った。ラディーチーという男はいつも根気よく詳しい覚え書を書いてきたからだ。「今日はこれからここで警察とおつき合いをしなけりゃならないな。わたしはドーセットの家で週末を過ごそうと思っていたところだったんだがね」オクテイヴィアンは自分の声に張りが無いのを知って、ひどくいやなことを経験したのだなと自覚した。だがそのうちに落ち着き、事務的になって、節度のある軽口もとばせるようになるだろう。

「よろしければ、わたしが警察に立ち会いましょう。どう

せ写真をとったり、いろんなことを調べるのでしょうから」とピランは言った。そしてさらに「そう、あのピストルに手をふれたことを警察に言っておかなければなりません。彼の顔を見ようとして少しピストルを動かしたのです。彼らはピストルにわたしの指紋がついているのに気づくでしょうから」と言いそえた。

「有難う。だがわたし自身が立ち会った方がいいたろう。可哀そうな男だ。どうして自殺などしたんだらう」

「わたしにもわかりませんね」

「彼はひどく変わった男だったな。あらゆることに心霊術を用いていたね」

「わたしは気づきませんでした」とピランは言った。

「あるいは、恐らく——いや間違ひなく、奥さんのことで、ひどくいやなことがあったのだらう。彼は奥さんが亡くなってから人間が変わったと、だれだったかわたしに話してくれたことがあった。わたし自身も彼はすごく元気がなくなったなと思っていた。君、覚えているかね、去年のあの恐ろしい出来事を——」

「ええ」とピランは答えて、そして犬の悲鳴に似たかん高い声でちょっと笑った。「役所の中で自殺するなんて、

ラディーチーの、あのとんでもない好みには全くびったりじゃありませんか」

「もしもし、ケイトかね」オクテイヴィアンはドーセツトにいる妻に電話をかけていた。

「まあ、あなた。お元氣？」

「元氣だよ」オクテイヴィアンは答えた。「しかし、役所でちょっと厄介なことがおきたんだ。それで明日の朝まで帰れそうにないんだ」

「あらまあ、それじゃバーバラが今夜帰国してくるといふのにあなたは戻れないのね」バーバラというのは十四歳になる彼らの一人娘であった。

「そういうことになる。本当に腹が立つよ。残念だ。だがここにいななくちゃならないんでね。警察の連中がやって来てひどくごたごたしているんだ」

「警察？ 何事が起きたの？ でも大したことではないんでしょ？」

「ウィーン、大したことであるような、ないような、実はある人物が自殺したのだ」とオクテイヴィアンは返事した。

「まあ、その人、わたしたちの知っている人なの？」  
「いやいや、そうじゃないんだ。ぼくらの知らない人間だ」

「そう、じゃよかった。あなたも大変ね。わたし、バーバラのためにあなたに是非家においてもらいたかったのよ。あの子、とってもがっかりすることでしょう」

「そうだろうな。でも明日は帰れるだろうよ。お前の方は変わったことはないかね？ わしの△大奥▽はどんな具合だ？」

「みんなと、つてもあなたに会いたがっていますわ」  
「それは嬉しいね。じゃこれで、奥方さま。今晚また電話するよ」

「オクテイヴィアン、あなた、デューケインさんを連れていらっしゃるのでしょうか？」

「そのつもりだ。いざれにしても彼も明日まで来れそうにない。だからわしは彼と車で帰るつもりだ」

「そりゃすてきね。ウィリーさんがあの人の来るのを待っているのよ」

オクテイヴィアンは微笑した。「彼を待っているのはお前じゃないのかね、わたしの奥さん？」



「あら、そりゃ、もちろんわたしだってあの人が来るのを待っているわよ。あの人はね、それこそ、なくてはならない人なんですもの」

「彼と一緒になさい。わしが世話しよう。お前が望むことならなんでもきいてあげるよ」

「まあ——、嬉しい！」

## 2

「あなたたちその石ころを全部お庭にお捨てなさい」  
フリー・クロウジアが言った。

「どうして？」エドワードがたずねた。

「それはお庭の石だから」

「どうしてなの？」とこんどはヘンリエッタがたずねた。  
双子のエドワードとヘンリエッタ・ピランは九歳であった。二人ともとてもよく似た顔立ちをしていて、同じように細い針金のような見事な金髪のもちやもちや頭をした、体のひよろ長い子供であった。

「その石ころはね、化石じゃありませんよ。だから何か特別に値打ちのあるものではないのよ」

「どんな石にも何かいいところがあるさ」エドワードが言った。

「エドワードが言っていることは形而上学的な意味じゃ全く真実だ」とシアダー・グレイが口をはさんだ。彼は赤

と茶の格子縞の化粧着を着て、ちょうど台所へやって来たところであつた。

「わたしは形而上学的な意味で家の中を片付けてはおりません」とメアリーが言った。

「ピアスはどこにいるのかね？」シアドーは双子にたずねた。ピアスはメアリー・クロウジアの息子で十五歳であつた。

「二階のバーバラの部屋だよ。貝がらでね、部屋を飾っている。きつとどつきり貝がらを運び込んだんだよ」

「まあ、なんとという事を」とメアリーは言った。海辺が家の真近にある。子供たちの部屋は砂や小石や碎けた貝がらや、すっかり乾燥した小さな海の動植物などでざらざらしていた。

「ピアスが貝がらを持ちこんでいいのなら、わたしたちも小石を持ちこんでもかまやしないわ」とヘンリエッタが理屈を言った。

「ピアスが貝がらを持ちこんでもいいとは、だれも言うてはいませんよ」メアリーは言った。

「だけど、小母さんはピアスにやめさせはしないでしょう？」とエドワードが言い返した。

「坊やぐらいの歳の時、もしわたしがそんな風に口答えしたら、とつてもひどくお尻をぶたれたものですよ」と家政婦のケインナーが口をはさんだ。彼女の名はメアリー・ケイシーというのだが、メアリーという名がメアリー・クロウジアと同じなので、彼女は動物の名前のようなケイシーという姓で呼ばれていた。

「そうだろうね。だがそれは間違っているよ。エドワードが言い返したぐらいで叱ることはないじゃないか。ところでお願いしてよろしければ、わたしにお茶をいれてもらえないかね？ 全く気分がすぐれないんだ」とシアドーが言った。

「可哀そうなケイシー。運が悪かったんだよ」エドワードが言った。

「わたしはピアスに止めさせるつもりはありませんのよ。というのはね、第一今さら止めさせても遅すぎるし、それに、バーバラが帰って来るといふ特別な日だからですよ」双子を相手だと、筋道を立てて議論すれば、すぐききめがあつた。

バーバラ・グレイは、去年のクリスマス以後、スイスのある花嫁学校に在学していた。そして復活祭の休暇には、

大変旅行好きな両親と一緒に、スキーをして過ごしたの  
であった。

「そんなことも人によっては結構なことですわ」とケイ  
シーが言った。それは彼女がしばしば口にするあいまいだ  
が、しかし人を納得させるような重みのある社交辞令であ  
った。

「ケイシー、わたしたちこのとりの足を貰っていい？」  
ヘンリエッタが聞いた。

「お腹をすかした猫のように、くず物入れの中をかきま  
わすこんな子供たちがいたのでは、台所を奇麗に片付け  
ておくなんてこと、わたしにはとてもできませんわ」

「なんでもかんでも引っ張り出すんじゃないのよ。ヘン  
リエノタ」とメアリーが言った。ひねって丸めたひとかた  
まりの紙くず、コーヒー豆、古くなったレタスの葉、それ  
に人の髪の毛がとりの足と一緒に出てきた。

「だれもわたしのことなど気にかけてはくれないんです  
からね。わたしはここで自分の人生をむなしく費やしてい  
るんだわ」とケイシーがこぼした。

「人生を空費しているのはだれもかれも同じだ」とシア  
ドーが言った。

「まあ、なんてこと言うの。シアドーさん」メアリーが  
口をはさんだ。「ケイシーを除け者にしないで頂戴。お茶  
はお盆の上にあるでしょう」

「レモンスポンジか。ふうむ。うまい」

「わたし、あなたは気分がすぐれないのかと思っていま  
したわ」とケイシーが言った。

「なーに。何か欲しくていらいらしていただけだ。ミン  
ゴはどこにいるんだろう？」

ミンゴというのは、灰色の毛を切っていないが一寸ブード  
ル犬に似た大きな大て、ノアドーがベッドで朝食をとった  
り、お茶を飲む時には、いつも彼の傍にいた。ケイトもオ  
クテイヴィアンもノアドーとミンゴとの関係について臆測  
する時には口汚かった。

「ミンゴを連れて来てあげるよ。シア小父さん」エドワ  
ードが大きな声で言った。

少しごとと音がして、豪華な鑄鉄製のストーブのうし  
ろからミンゴが姿を現わした。そのストーブは使用するの  
には費用がかかりすぎるし、料理用にも役に立たなかった  
が、それでも台所の暖炉の大きくくぼんだ場所にどっかと  
すえられていた。シアドーはお茶をのせた盆を持ち、双子

を後に従えて階段を上がり始めた。双子たちは、自分らで定めたたくさんの儀式の一つに従って、二人の間に犬を抱かえ込むようにして連れていった。エドワードの腕の下から犬はおかしな笑顔をのぞかせ、毛深い足を引きずり、ソーセージのような形の、よく動く尻尾が、ヘンリエッタのギンガムの服の裾をリズムミカルに持ち上げていた。

シアドはオクテイヴィアンの兄であった。彼は以前インドのデリー市で技師をしていたのだが、体が弱くて、現在はまだ長い間失業していた。彼がある疑惑を受けてインドを去ったということは世間によく知れていたが、シアドがインドを去ったのは、どのような疑惑を受けたからなのかを、これまで、だれ一人ははっきりさせることはできなかった。また彼が弟を本当に好きなのか嫌いなのかもわからなかった。オクテイヴィアンに対して彼が軽べつするような言葉を口にしても、家族の者はみなそれを無視した。彼は背が高く瘦うすれており、しらがまじりの髪も部分的にはげっていて、突出した眉は象形文字のような見事な形をし、厳しくて抜目なく、思慮深そうな目をしていた。

「ポーラ、あなた食卓でしか読書できないの？」とメアリーが言った。

ポーラ・ピランは双子の母親で、そう言われても夢中になつて本を読んでいた。彼女は子供たちのしつづけを放棄していた。そんな時、彼女は子供たちと同じ世代のように見えた。殊にメアリーにはそう思われた。ポーラは二年余り前にリチャード・ピランから離婚された女であった。メアリー自身も、もう久しい間未亡人であった。「ごめんさい」とポーラは言つて、リユークリーシャス（ローマの哲学者で、紀元前九九年から五十五年まで生存、ラテ）のテキストを閉じた。ポーラはこの地方の学校でギリシア語とラテン語を教えていた。

食事時間はメアリーにとつて大切な時間であった。それは話合ひの時間であり、その重要さにおいてほとんど宗教的ともいえる儀式的な集くいの時間であった。人間の言葉と、その時たまたまだれかと一緒にいるということが、人の苦痛や傷口をいやすのだ。その苦痛や傷口は、恐らく彼女のみがはつきり気づいている融和の世界、その融和の世界に近いものを絶えず作り上げようとするメアリー自身のいらした落ち着きのない感受性にとつてだけ、多分明白なのだろう。人間と人間の触れ合ひに関するこれらの主張に、メアリーはだれも逆さからうことのできない権威を持つていた。もし家族に共通する意識がない時には、メアリーは共

通の意識を作り上げた。朝食、昼食、お茶、夕食の時間を規則正しく守ることは好ましいことであり、その上、メアリーが感じているように、それは、取りかえしのつかない無秩序な状態に落ちこむ瀬戸際のところ、形式的な形を整えるいくつかの要素のうちの一つであった。

暑い太陽の光が、片側はすいかずら、他の片側は藤で、青々とした日蔭になっている、ピクトリア朝のゴシック建築の、上部が見事に尖った大きないくつかの窓と、白く塗った鑄鉄製の窓格子越しに差しこみ、赤と白の格子縞のテーブル・クロスの上のお菓子の上のお菓子のくず、コーヒー豆、それにリノリウムを敷きつめた床に落ちていて人間の髪の毛を照らし出していた。双子たちはお茶をすませたし、シアはお茶を自分の部屋へ運んでしまったし、ピアスはお茶におりて来なかったし、ケイトはいつものように後で飲むので、今はその場所でメアリーとポーラとケインシーの三人がお茶を飲んでいた。

「彼女また新しい車を買ったのよ」とケインシーが言った。

「あんた、だれのことを言っているの、ハッキリ言ってほしいわ。だれに対しても、彼女Vだなんて言わないで頂戴」メアリーが言った。

「わたしの妹よ」ケインシーは彼女が、くぐうたら女Vと呼んでいた病弱な母親を、母親が死ぬまで看病して人生の大半を過ごしてしまったので、そんな苦勞もせず、金持の男と結婚してしまった妹を許すことができないのである。彼女は赤ら顔の大味な顔立ちの女で、白毛まじりの固い髪をまきつけていた。テレビで悲しい場面を見ると、彼女はひどく心をうたれて大声をあげて泣き、そしていらいらしているメアリーの心にもない同情を求めたのであった。

「どんな車なの？」ポーラはうわの空でたずねた。彼女は相変わらずリユークリーシャスについて考え続けている、ある文章が試験に出すには難かしすぎるかしらと思案していたのだ。

「トライアンフ(車の型の名)か何かだったわ。ある人たちにとってはいい車なのよ。コスタ・ブラバヤその他何もかも」

「わたしたちね、今日、あの空飛ぶ円盤見たのよ」とヘンリエッタが報告に来た。彼女はバーバラが可愛がっている猫のモントローズを抱いて戻って来たのである。双子たちはよくそんなことを言った。

「本当？」メアリーがきいた。

「ヘンリエッタ、お願いだからモントローズを食卓の上におかないでね」

モントローズは大きくてココア色のぶちのある猫で、眼は金色で、角張った体つきから直角に伸びた足をし、頑固で自分のことだけに夢中になる性質を持っていた。この猫の聡明さについて、子供たちの間で激しい議論がおこった。モントローズの賢さを調べる方法がたえず考案されていた。だがその結果でできたデータの解釈については幾分不明確であった。というのは、双子たちはいつでも大原則に立ちかえって、人類と協力することが、いったい猫の聡明さのしるしなのかどうかを、議論しようとしたからである。モントローズは一つの疑う余地のない立派な能力を持っていた。それは彼が思いのままにつややかな毛を逆立てることと、すべすべしたむき出しの立方体からふわふわした球体へ飛び移れることであった。これはハモントローズの飛鳥の姿と呼ばれた。

「妹夫婦がどうして儲けているのか聞かないで頂戴。そんな事聞いたら、あなたたちも社会主義者になってしまいたくなるわ」とケイシーが言った。

「でもあなたは社会主義者じゃないの？ ケイシー」と

メアリーが言った。もちろんそんな風に言えばみんな社会主義者である。しかしケイシーの場合には、それはただやりくり上手を意味するように思われた。

「わたしは社会主義者じゃないわ。そう言わなかったかしら？ わたしはただあなたも社会主義者になってしまいたくなるだろうと言ったのよ」

「鳥の中でどれが一番大きいか知っている？」と、エドワードはメアリーと妹との間に割り込んで行ってたずねた。

「いいえ。どの鳥なの？」

「ひくいどり。あの鳥、バプア人を食べるんだよ。足で突っかかってバプア人を殺すんだって」

「わたしコンドルの方が大きいと思うわ」ヘンリエッタが言った。

「それはお前が翼の長さで言っているのか、重さで言っているのかで、きまるのさ」とエドワードが答えた。

「アホウドリはどうなの？」ポーラが聞いた。彼女はいつも喜んで自分の子供たちの議論に仲間入りした。彼女は常に子供たちを理性を備えた大人のように考えて彼らと接していた。

「アホウドリは翼の長さが一番長いんだ。だけど体はかなり小さいよ。もし人間が飛ぼうとしたらどれくらい大きい胸骨が必要か知ってる？ メアリー小母さん、もし人が飛ぼうとしたら、胸骨がどのくらい大きくなければいけないか、小母さん知っている？」とエドワードが言った。

「知らないわ。どのくらいなの？」メアリーは言った。  
「幅十四フィートだ」

「本当？ まあ驚いた！」

「コンドルの場合は……」とポーラが言いかけたその時、「お止めなさい。気をつけるのよ。ヘンリエッタ」とメアリーがヘンリエッタに注意した。ヘンリエッタはモントロイズの足の一つで兄の顔をたたいていた。

「大丈夫よ。爪をひっこめてるから」

「もしわたしが猫だったら、爪をひっこませてはいないわ」とケイシーが言った。「わたしがあなたの年ぐらいの時には、ペットを手荒く扱わぬように教えられたものよ」

「あんたたち、この石ころをなんとかして頂戴。わたしたちみんな石の上に倒れてしまうわ。値打ちのある順番に石ころを並べることができないの？ それにあまり値打ちのない石があったら、お家の中が外と同じようになってし

まうでしょう？」とメアリーは言った。

値打ちの順に石を並べるといふその考えは直ちに双子の心をとらえた。二人は猫を下におくと、小石の山を中にして床ゆかにすわりこみ、やがてどの石がより値打ちがあるかという議論に夢中になってしまった。

「シアさんはウイリーさんを見舞いに行ってきたのかしら？」とポーラがたずねた。

「いいえ。わたしもウイリーさんを訪ねてあげたらどうと言ったんだけど、あの人笑って、わしはウイリーの看視人じゃない、と言ったのよ」

ウイリー・コーストは亡命中の学者で、トレスコウム・コッティジとして知られているオクテイヴィアンの屋敷内の、トレスコウム・ハウスから少しばかり岡を登ったところにある、パンガローに住んでいた。ウイリーは家事に対する不安が原因でゆうつ、症にかかっていた。

「わたし、あの人たち、また口論したんだと思うわ。二人とも子供のようなんだから。あなた行ったの？」

「いいえ」メアリーが答えた。「その機会がなかったの。それでピアスを行かせただけど、ウイリーさんには別に変わったこともなさそうよ。あなたはいらっしゃったの？」

「いいえ。わたしも今日はとっても忙しかったの」とポーラが言った。

ポーラの返事を聞いて、メアリーは少々ほっとした気持ちになった。ウイリー・コーストについては自分に特別な責任があり、何と言っても、彼は自分と密接につながっているのだ、と彼女は考えていた。そして自分が、常にウイリーがどうしているかを知っている唯一の人間であることが、重要なのだと思っていた。彼女はきつと明日は出かけて行って彼に会うことだろう。

「デュケインさんが来たほうがいいわ」ポーラが言った。「あの人に会うとウイリーさんはいつも機嫌がよくなるんだから」

「デュケインさんが来るの？」とメアリーが聞いた。「わたし、誰かが思わぬ時に思いがけないことを聞かしてくれるのを楽しみにしてるのよ」

「お部屋の用意ができていないのをご存じでしょうね？」とケインーが言った。

「ケイトがいつものように、もうちゃんとしているでしょうよ。だからあの人、あなたに言わなかったのよ」

ジョン・デュケインはオクテイヴィアンの友人であり、

仕事の上の協力者であった。彼は週末にはしばしばここを訪れる客でもあった。

「ケイシー、お茶がすんだら部屋を片づけてくれない？」  
「まあ、嫌なこと」ケイシーは言った。「今はわたしのほんのちょっぴりの自由時間なんですからね。でもあとでよければ、もちろん片づけてさし上げますよ」

その時ケイト・グレイがミンゴを従えて台所へはいつて来た。するとその瞬間、まるで何か物を貫き通す星の光線に当てられたかのように、その場のものはそれぞれの原子にばらばらに分解し、そしてケイトを中心にとりまいて再び集まった。メアリーはある磁力線にひきつけられて、犬のように真面目な微笑を浮かべたポーラの顔を見つめ、彼女自身もまた顔を上げてほほえみ、自分の髪の毛が揺れて、うしろへ吹き流されているように感じた。ミンゴは吠えた。モントローズはテーブルの上に飛び上がった。ケイシーはいつもより熱い湯をポットの中へ注ぎ入れた。双子たちはそれまで一生懸命に並べていた小石をかきまぜると、おしゃべりをし始め、砂で汚れた手でケイトの縞の服のベルトをつかんだ。

ケイトの晴れやかな丸い顔が、金色のふわふわした髪



中から、彼女らに向かつて輝いた。彼女の暖かを取りつくるわなない態度によって、くせのない黒い髪を耳のうしろまでまきあげ、ウィクトリア朝時代の家庭教師の風采をしたメアリー、細長い頭の中高の顔を短かく刈った茶色の髪の毛でうまくつくろったポーラ、この二人の髪をよく手入れされた様子や、すんなりした身体つきや小じんまりとした様子が、はっきり浮き出るのであった。彼女自身はそれほど際立っていないのに、ケイトは他の人たちを、その人たちのより明確な人柄を浮彫りにするおしゃべりや感情の高ぶりや明るさを際立たせる人間であった。ケイトは軽いどもりで、しかも彼女の言葉には少しアイルランドなまりがあった。

「オクティヴィアンはいずれにしても今夜は帰れないのよ」

「おやまあ、バーバラが帰ってくるというのに」とメアリーが言った。

「そうなのよ、ひどいことだわ。お役所で何かあったらしいの」

「どんなこと？」

「だれかが自殺したんですって」

「まあ、大変」ポーラが言った。「それで、その人、お役所の中でやったの？」

「そうよ、恐いわね」

「どんな人、その人？」とポーラがたずねた。

「わたしも知らないの」

「名前は何と言うの？」

「聞くのを忘れたのよ。その人、わたしたちの知っている人じゃないんですって」

「かわいそうな人」とポーラが言った。「わたし、その人の名を知りたかったわ」

「どうして？」と、にわたりの足の臄をひねくりまわしながらエドワードがたずねた。

「どうしてって、もし名前を知っていたら、何と申してその人について考えるのがずっと容易になるからですよ」

「どうしてなの？」今度はヘンリエッタがたずねた。彼女は別なにわたりの足を庖丁で切り裂いていた。

「あなたがたずねるのも無理はないわ」ポーラが言った。

「人間があらゆることについて考えることができ、しかもそれがどんなに遠くかけ離れたことであっても、人がそれ